

後三年の役 「後三年合戦絵詞」から

東京国立博物館蔵

でお供するのが、私の志だ」と再びとつて返し、彼の従者たちも、「御主人が將軍のために死なれるのに、我らだけが生きのびるわけにはいかぬ」と、主人ともども奮戦して戦死した。佐伯経範は、相模秦野の有力御家人波多野氏の先祖とされているが、すでに十一世紀に武士の社会に強い主従関係が生まれつつあったことがうかがわれる。同じ戦で頼義に従って奮戦した藤原景通・景季父子も、相模国鎌倉党の先祖と考えられている。

前九年役後およそ二十年、前九年の役で苦戦する頼義を助けて勝利にみちびき、奥州の王者となった清原氏一族の内紛に、陸奥守源義家が介入して起こった後三年の役でも、相模武士は、義家軍の中心となった。中でも有名なのは鎌倉権五郎景正である。彼は十六歳で従軍したが、右目に敵の矢を射立てられ、首筋まで射貫かれた。しかし、彼は屈せず、そのまま相手を射殺してから陣に帰って横になった。武勇のほまれ高い三浦為次（為継）は、景正に近づき、毛皮の沓をはいたまま景正の顔をふんで矢を抜こうとすると景正は、

突然足下から為次を突き殺そうとした。おどろく為次に景正は、「弓矢に当たって死ぬのは兵ののぞむところだが、生きながら顔を土足で踏まれるのは、とんでもない。お前はおれの敵だ」といった。勇猛と名を重んずるは、武士の魂といわれるが、その源を相模武士にみる。景正が、後に鎌倉市内に御霊神社として祀られているのも、故なしとしない。

こうした相模武士に支えられた義家は、京都の貴族たちから、「天下第一の武勇の士」といわれることとなるのである。

### 莊園と武士

後三年の役の勇者、鎌倉権五郎景正は、十二世紀の初め、今の藤沢市大庭付近一帯の山野を浮浪人を招きよせて開発し、国司の許可を得て、伊勢皇大神宮に御厨として寄進した。御厨は、神社や天皇の供御物の魚貝類や疎菜類を、年貢として納める所領のことである。頼義・義家に従った武士は、いずれも鎌倉時代には、名字の地の開発領主であり、この大庭御厨は、以前は、国衙領大庭郷の地であったが、景正が神宮領に寄進したとき、領内に十二郷あったという。天養元年（一一四四）当時には、東に玉輪荘との間を流れる俣野川、南は相模湾、西は一宮である寒川神社の神郷との境、北は大牧崎であると主張されている。東西約九<sup>キ</sup>ト、南北約七<sup>キ</sup>トの地域である。この年、鎌倉館を拠点としていた源義朝の郎等らは、大庭御厨の鶴沼郷は、鎌倉郡の内であると称して、国衙の官人と協力して侵入し、御厨を国衙領にしようとした。この時、御厨の西端の殿原郷・香川郷（茅ヶ崎市）に対しても、国の目代らが、国役の催促を行っている。平安時代の末、院政による

3 中世の夜明け

相武の荘園一覧表

郡名	荘園名	荘園領主	在地領主	初見年代
足上郡	1 大井荘	延勝寺	不明	文治3 (1187)
	2 狩野荘	不明	不明	興国2 (1341)
	3 大友荘	八幡宮	大友氏	延長5 (1253)
足下郡	4 成田荘	藤原頼長 (1156年まで) ↓ 後白河天皇 (1161年まで) ↓ 新日吉社 (1161年以後)	不明	保元1 (1156)
	5 曾我荘	不明	曾我氏	建久4 (1193)
	6 { 早川牧 早川荘	遠江守大江公資→[本家] 藤原長家→以後藤原摂関家	不明	嘉保2 (1095)
余綾郡	7 中村荘	不明	中村氏 (庄司)	天養1 (1144)
	8 河勾荘 (二宮河勾荘)	京極局→[本家]八条院 (1167年以降?)	不明 (中村氏一族か)	暦仁1 (1238)
	9 波多野荘	冷泉宮(三条皇女)(11C前半?) 藤原氏摂関家・近衛家領	波多野氏	保延3 (1137)
大住郡	10 旧国府別宮 旧国府前取荘 (四宮荘)	石清水八幡宮 八条院、蓮華心院 (1174)	三浦氏 (?)	保元3 (1158)
	11 糟屋荘	安楽寿院	不明	文治1 (1185)
	12 豊田荘	不明	糟屋氏	久寿1 (1154) 立券
	13 石田荘	円覚寺正統院	大庭氏	文治4 (1188)
愛甲郡	14 石田荘	不明	不明	正平6 (1351)
	15 愛甲荘	熊野山	愛甲氏 (?)	寛元1 (1243)
高座郡	16 毛利荘	不明	毛利氏、源義隆	養和1 (1181)
	17 国分寺	某大寺	不明	久安5 (1149)
	18 一宮荘	不明	不明	正平8 (1353)
	19 大庭御厨	伊勢神宮 (内宮)	鎌倉景正、大庭氏 (下司)	永久4 (1116) 国免 永治1 (1141) 奉免 治承4 (1180) 宣旨
鎌倉郡	20 渋谷荘	不明	渋谷氏	
	21 吉田荘	円満院 (園城寺門跡)	渋谷氏	建久3 (1192)
	22 玉輪荘	不明	不明	天養1 (1144)
三浦郡	23 山内荘	長講堂	山内首藤氏	治承4 (1180)
	24 三浦荘	不明	三浦氏 (庄司)	天養1 (1144)
久岐良郡	25 三崎荘	冷泉宮(11C前半?)→ 藤原氏摂関家・近衛家領	不明	建長5 (1253)
	26 六浦荘	不明	北条氏	宝治1 (1247)
橋樹郡	27 稲毛荘	藤原氏摂関家→九条家	稲毛氏 (?)	承安1 (1171)
	28 賀勢荘	宜陽門院	不明	鎌倉前期 (?)
	29 河崎荘	徇修寺 (1336)	不明	弘長3 (1263)
	30 橋御厨	伊勢神宮	不明	鎌倉末期
都筑郡	31 榛谷御厨	伊勢神宮 (内宮)	榛谷氏 (?)	保安3 (1122)
	32 恩田御厨	不明	不明	嘉暦3 (1328)
	33 小山田荘	不明	小山田氏	正平19 (1364)

国衙領の再興運動が行われたが、その一端であろう。大庭御厨に対する、源氏の武力を背景としたこの運動も結局不成功に終わった。それだけ、伊勢大神宮の力は武士に対して強力であったといえよう。

県南の大庭御厨に対し、県北に成立したのが稲毛荘である。この荘園は、現在の川崎市高津区から中原区にまたがる地域で、その開発は、川崎市多摩区の北部、細山・金程・菅一帯の小沢郷を所領とした稲毛三郎重成である。稲毛重成も有力な鎌倉武士である。開発の時期は不明であるが、大庭御厨よりはおくれると考えられる。稲毛本荘と新荘とがあり、本荘には稲毛郷・小田中郷・井田郷がある。これらは「和名類聚抄」に見えないので、開発によって成立した中世的な郷であろう。田地二百六十三町歩余、荒田二百六十二町歩余、合わせて五百町歩余りの田地があり、外に新田五十五町歩余が記録されているが、年貢は、町当たり八丈絹二疋である。絹織物で納めることになっているのは、桑の栽培と養蚕、そして絹が生産されるのが、この荘のものと姿であったのであろう。多摩川畔は本来、さらし布の産地であるのに、絹を年貢とするのは、かつて絹生産の強制があったのであろう。この荘園は九条家を本所と仰いだ。

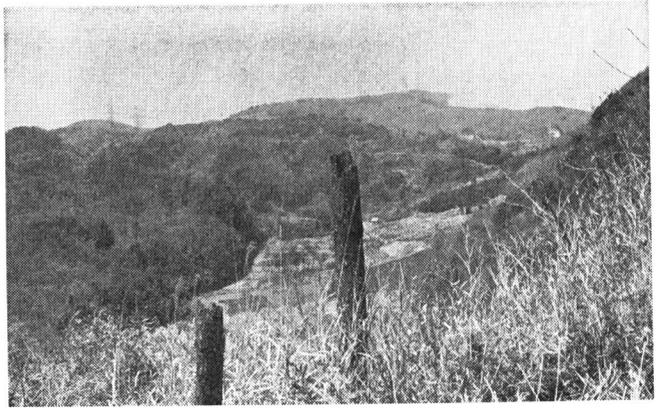
県央西部には、伊勢原市上糟屋・下糟屋・高森・小稲葉・平塚市小鍋島を含む広大な糟屋荘が久寿元年（一一五四）に、荘園となり、平治元年（一一五九）島羽上皇が鳥羽離宮内に建立した安楽寿院領となった。鎌倉武士糟屋氏が名字としているのは、その開発にかかわったからであろう。系図ではこの氏は、藤原元方の子孫となっているが、後三年役に頼義に従った佐伯元方で、平安時代の国衙の官人であろうとの説が信憑性が高い。

この外、平安末までに、県域には次の諸荘が成立し、各荘園内は、その荘名を名字とする武士の本貫地となっていた。彼らは、その荘の開発領主とみて差支えなからう。

まず相模国内では、足上郡に大井荘(大井町・小田原市下大井、京都延勝寺領、武士不明)・大友荘(小田原市東大友・西大友、八幡宮領、武士大友氏)・成田荘(小田原市成田、左大臣藤原頼長領、保元乱で後白河院領となり、京都の新日吉社領に寄進され、領家職は鎌倉中期に後嵯峨天皇皇后大宮院西園寺嫡子、龜山天皇皇女昭慶門院喜子内親王と伝領された)・曾我荘(小田原市、武士曾我氏)・早川荘(小田原市、本家藤原道長の子長家、領家大江公資、武士土肥氏)・中村荘(中井町、武士中村氏)・河勾荘(二宮町、鳥羽上皇皇女八条女院暲子内親王領)・波多野荘(秦野市、皇室領、のち近衛家領、武士波多野氏)・前取荘(平塚市、皇室領)・豊田荘(平塚市、武士豊田氏)・愛甲荘(厚木市、熊野山領、武士愛甲氏)・毛利荘(厚木市、武士毛利氏)・渋谷荘(綾瀬市・藤沢市、武士渋谷氏)・吉田荘(横浜市戸塚区、武士渋谷氏)・山内荘(鎌倉市、武士山内首藤氏)・三浦荘(横須賀市、武士三浦氏)・三崎荘(三浦市、三条天皇皇女冷泉院宮領、のち近衛家領)・六浦荘(横浜市金沢区、武士金沢氏)・賀勢荘(後白河上皇皇女宣陽門院觀子内親王領)・河崎荘(川崎市、武士河崎氏)・橘御厨(川崎市高津区、大神宮領)・榛谷御厨(横浜市旭区、伊勢内宮領、武士榛谷氏)・小山田荘(町田市、武士小山田氏)等が、平安末期ごろまでに県下に成立した荘園と、そこを名字の地とする武士たちである。

### 公領と武士

これまでの通説では、十一〜十二世紀に全国に荘園が展開すると、公地制は崩壊して、国司の支配する公領は見る影もなくなつたと考えられて来た。たしかに国によっては、そうした状況を自



衣笠城跡から旧三浦荘を望む 三浦市

ら公言している国司もある。しかし最近の学説はかえって逆で、十二〜十三世紀は、荘園と並んで公領も、中世の支配体制を構成していると指摘され、これを荘園公領制とよぶべしとの説が唱えられている。この見地から、中世の公領の研究の必要性が認められて来たが、明らかに公領とみとめられる資料は少ない。かつ公領は、荘とはいわず、郷・保・村・名・山等の名称をもつてあらわれるが、郷も村も名も山も、中世では、荘園内の地名としても盛んに用いられているので、その識別には、甚だ不確定さが伴う。これらの点に留意しつつ慎重に取扱う必要がある。石井進が、県史の資料編の中から抽出した十四世紀末までの公領の数は合計百二十か所にも及ぶ。

公領の基本単位として圧倒的に多いのが郷であるが、この郷のうち、五十戸一郷とした郷を書き上げた「和名類聚抄」の郷名と一致するものは、相模国で七、県域武蔵三郡で三しかなく、かえって近世以降の村名と一致し、現在まで地名としてその名を伝えるものが圧倒的に多い。これは、律令制の郷と比べて、中世の公領の郷は、より小範囲の地域で、近世から近代につながる村落をもとしたものであることを意味する。中世の荘園内にも複数の郷が出来たが、これも全

く公領の郷と同じ性格のものであり、ここに荘園公領の同質化がうかがえる。

公領の郷には、その地域を管理し、徴税をうけおう役人として郷司がおかれ、主として在地の有力者が任命され、郡司と並んで国衙に直結した。愛甲郡古庄郷（厚木市飯山附近）には郷司近藤太、足下郡大友郷（小田原市東大友・西大友）の郷司職を世襲した大友氏、高座郡下海老名郷の郷司海老名季景の名が史料にのこされているが、鎌倉時代の初期に、松田郷（松田町）を支配していた波多野松田氏、河村郷（山北町）の河村氏、土肥郷（湯河原町・真鶴町）を支配していた土肥氏などの武士も、それぞれの郷司をつとめていた家柄であったと思われる。すなわち公領内にも開発有力武士が成立していたのである。大友・松田・河村・土肥・岡崎・古庄・飯田・長尾・芦名・和田・平子・恩田・市尾の武士たちはこれにあたる。

### 源義朝父子 の相武経營

鎌倉郡由比郷・小林郷・大倉郷・深沢郷等、今日の鎌倉市域の大部分を占める地域は公領であった。この地の館に居をかまえる義朝が、在庁官人と共同して大庭御厨を公領と称して停廃しようとした根拠である。義朝は、同じ在庁官人である三浦介義明の女との間に長子義平を、波多野荘の領主波多野義通の妹との間に次子朝長をもうけた。朝長の屋敷は波多野氏の所領松田郷にあつて、その侍所は二十五間あつて、鎌倉幕府開設当初の侍所の十八間よりはるかに大きかった。波多野氏の兵力、またこれを同族に組み入れた義朝の軍事力を推察できよう。三浦介に至つては、さらに強大である。義朝はやがて帰京し、隠居した父為義のあとをついで、源氏の棟梁となる。



三浦義明像

横須賀市 満昌寺藏

義朝が鎌倉を去ったあとの相武経営をついだのが、義平である。若年ながら「鎌倉の悪源太」とよばれた猛者であり、わずか十五歳のとき、武蔵国大蔵館（埼玉県）に、叔父の帯刀先生（たてわきせんしやう）義賢（よしかた）を攻め殺して、一躍武名をあげた。義賢は、上野国多胡郡（たごぐん）を本拠とし、武蔵の有力武士秩父重隆（ちちぶちゆうりゆう）と結んで、義朝が勢力をはる相武の地をねらっていたのである。義賢の遺子義仲（よしまか）は、信濃（しんりゆう）の木曾谷（きそや）にのがれ、源頼朝と対決することになる。

**京洛に戦う 相武の武士**  
保元元年（一一五六）京都に起こった保元の乱には、後白河天皇・関白藤原忠通対崇徳上皇・左

大臣藤原頼長の政権争いが、武力闘争にまで発展したものである。天皇側も上皇方も、それぞれ源平の武士を招いて戦いにのぞんだが、天皇方の召に応じた義朝は、多数の東国武士を率いて参加した。その中には相模の武士として、大庭平太景義・同三郎景親・山内刑部丞俊通・同子息滝口俊綱・海老名源八季貞・波多野小二郎義通、武蔵国三郡内の武士として、師岡氏が名を挙げている。この外、武蔵では豊島・中条・成田・笈田・河内・別府・奈良・玉井・丹治・斎藤・榛沢・榎沢・見玉・秩父・栗飯原・猪俣・金子・河句・手薄加・村山党金子・山口・平山・河越の面々も従ったとある。義賢討滅後の武蔵武士も、大庭御厨事件では敵対関係にあった相模武士大庭氏

も加わっていることは、義朝・義平父子の相武武士団の再編成の成功を物語っている。

これに対し、義賢を通じての東国武士団の組織に失敗した父為義方に従うものは、源基実の女を母とする頼賢・頼仲・為宗、賀茂神主成宗の女を母とする為成、江口の遊女を母とする鎮西八郎為朝ら、京洛に住む子息らが主力となったにすぎない。為義自身も中宮亮藤原有綱の女を母としていた。東国とは縁は薄かったのである。保元の乱の勝利に大きな貢献をした義朝は、その武功にかえて父為義の助命を請うたが許されず、降伏して来た父をはじめ多くの弟たちの死刑を強要され、しかも恩賞は、同じ天皇方に加わった平清盛一族にはるかに及ばなかった。

こうしたことに不満をいだいた義朝は、平治の乱(平治元年―一一五九)には、藤原信頼に協力して平清盛と戦い、惨敗する。この乱にも相武の武士は、義朝に従い、とくに山内俊綱は六条河原で討死し、その父俊通は、義朝敗走の防矢ふせやして戦死した。

保元・平治の乱後の戦勝者側の敗者に対する追求はきびしかった。保元の乱では、そのため源為義一家は全滅し、平治の乱では、源義朝一家は、幼児に至るまで斬首ざんしゅされた。わずかに、平清盛の継母池禪尼いけのぜんにの助命によって源頼朝と、常盤御前とまわびげんを意に従わせようとして許した義経ら数子が見逃された。頼朝は、平家の腹臣山木兼隆かねたかが目代となっていた伊豆国に流され、義経は、僧侶となって寺院山林にひそんだ。

平氏は、源氏の棟梁一家に対して追求はきびしかったが、源氏の棟梁の下に結集した東国武士団に対しては、

寛大であつた。彼らは荘司であつたり、郷司あるいは在庁官人が本職である。戦敗者として武威を振うことは出来なくなつたが、その本職を失つたわけではない。その上棟梁と武士たちの関係は、封建制度が未熟なため、中世ほど絶対的ではない。数百騎あげられている東国武士団のうち、源氏の棟梁のため戦死した武士は、数指を数えるにすぎない。その大部分は、敗色濃くなると、それぞれ戦場を離脱して、本名の地にかえり、あるいは京都にとどまつて内裏大番役の勤仕をつづけ、内裏番役を指揮する平氏の傘下に入った。平氏は、つとめてこれらの源氏武士団の組織化につとめた。保元・平治乱では源氏に従つて奮戦した大庭景親などは、平家側の武士団の統率者の地位につき、平治の乱で義朝のため戦死した山内首藤氏や、為義の子朝長のため宏大な館をつくつた波多野氏らをも、その傘下に収めた。平氏全盛時代の平家家人の調査によると、伊勢国の武士五十九氏について、武蔵国四十六、相模国三十八氏が見出され、侯野景久(大庭御厨侯野郷)・長尾為景(鎌倉郡長尾郷)・梶原家景(鎌倉郡梶原郷)・八木下正常(足下郡柳下郷)・香川五郎(高座郡香川)・渋谷重国(渋谷荘)・国分太郎(国分寺荘)・本間五郎(愛甲郡本間)・曾我祐信(曾我荘)・糟屋盛久(糟屋荘)・河村義秀(河村郷)・飯田五郎(高座郡飯田)・毛利景行(毛利荘)・土屋義清(土屋荘)・土肥実平(土肥郷)・三浦義澄(三浦郡)の面々である。荘園公領のいずれにもみられ、彼らの大部分は、頼朝挙兵の当初は、平家側の総大将大庭景親に従つて、頼朝の身命を危うからしめたのである。

# 中 世

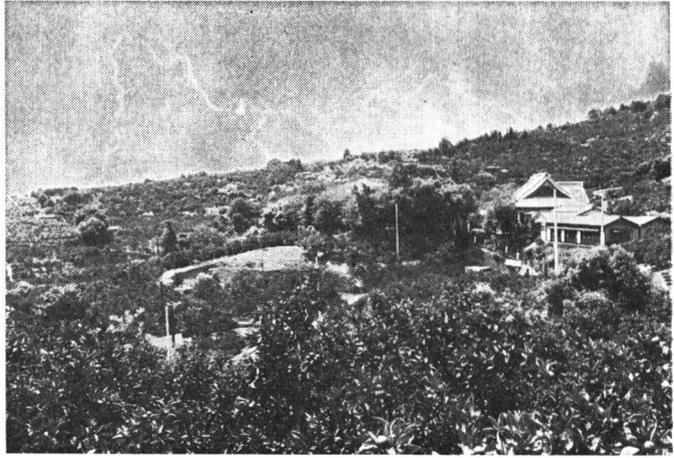


# 一 武家の府鎌倉

## (一) 鎌倉殿の誕生

頼朝鎌倉に入る  
平治の乱から二十年の歳月が流れた。十五歳で伊豆蛭子島（ひるがこじま）（静岡県）に流された源頼朝も三

十五歳の壮年に達した治承四年（一一八〇）、京都で源頼政の勧めをうけて、反平氏の兵を挙げた以仁王（もちひとおう）の令旨が、頼朝のもとに届けられた。これをうけて八月十七日夜、頼朝はかねて連絡のあった伊豆や西相模の武士たちや、妻政子（まさこ）の父で伊豆の在庁官人であった北條時政らと共に蜂起して、伊豆国目代山木兼隆を襲撃して殺し、国府の実権を握り、東国支配の権限を頼朝に与えたとある以仁王の令旨を陣頭にかかげ、東国を目ざして進んだが、今の小田原市南部の石橋山で、大庭景親（おおばかげちか）の率いる三千余騎に迎えられて惨敗した。ようやく土肥実平（とひさねひら）の助けにより、真鶴崎から海路安房にのがれた。ここで三浦半島で頼朝に呼応したが間に合わず、畠山勢に追われた三浦氏一族と合流して、勢力を回復し、上総の上総介広常、下総の千葉介常胤（つねたね）らの帰服を得、ついで武蔵に入って畠山氏・江戸氏・河越氏などの有力武士団をその手勢に加えながら、大軍となって相模に入り、千葉介常胤の進言に従って、父祖ゆかりの要害の地鎌倉をその本営と定めた。十月七日鎌倉に入った頼朝は、頼



石橋山合戦場跡 小田原市

は平氏・義仲・頼朝三分の形勢となった。鎌倉は、伊勢国を含む東国支配の府となり、相模国は、一挙に歴史の中心舞台となった。頼朝自身は鎌倉を動かさず、異母弟の義経・範頼に東国勢を率いて東上させ、元暦元年（一一

義が勧請した石清水八幡宮を鶴岡に移し、自邸をその東側の大倉に定め、大庭景義に工事の監督を命じた。武家の府鎌倉の発足である。

十月、東下する平家軍を迎えうつため、駿河国（静岡県）賀島に出陣したが、富士川対陣で平家軍は潰走、頼朝は追撃しようとしたが、千葉常胤・三浦義澄らの忠告によつて中止した。二十五日相模松田亭に入り、反転して常陸佐竹秀義追討に進発、途に萩野俊重を滅ぼし、十一月十七日鎌倉に帰着。同日和田義盛を侍所別当に任じ、十二月十二日大倉に竣工した新邸に移った。この時出仕の御家人は和田義盛以下三百十一人、それぞれ宿館を構えた。武家の府としての鎌倉は、その性格を確立し、これまで海人野叟（漁夫・農夫）の外は住む者もなかった鎌倉は、武家屋敷が門を並べるようになった。

このころ平家は京都に政権を握っていたが、寿永二年（一一八三）九月、北陸道を攻め上った木曾義仲に迫られて西海に脱出し、天下



源頼朝像

東京国立博物館蔵

八四)木曾義仲を亡ぼし、文治元年(一一八五)三月平氏を長門壇浦(山口県)に挙族滅亡させた。文治五年(一一八九)には奥州藤原氏を滅ぼして、天下を統一した。これらの勝利は、専ら相武を中心とした関東武士のはたらきによる。このころ頼朝は鎌倉殿とよばれ、京都では、治承五年を養和と改元したにもかかわらず、頼朝は治承の年号を用いつづけて、独立政権であることを表明したのである。

### 鎌倉幕府の成立

頼朝は、安房から転進して鎌倉に入ると、まず武士の統制と支配、軍目付の任にあた

る侍所を設置して和田義盛を別当に任じ、頼朝が流罪中も彼と交流のあつた京都の文人たちを政務の事務官に起用して、政治の体制をととのえた。頼朝の乳母の一人の妹の子にあたる三善康信、以前頼朝の養育にあつて頼朝年来の知り合いである中原親能、及びその弟大江広元ら、文筆にすぐれた人々を公事奉行人として、東国支配者としての統治を進めた。元暦元年(一一八四)公家にならつて公文所(政務の処理機関)や問注所(裁判機関)を設け、大江広元を公文所別当に、三善康信を問注所別当に任じた。文治元年(一一八五)頼朝が従二位に昇進する

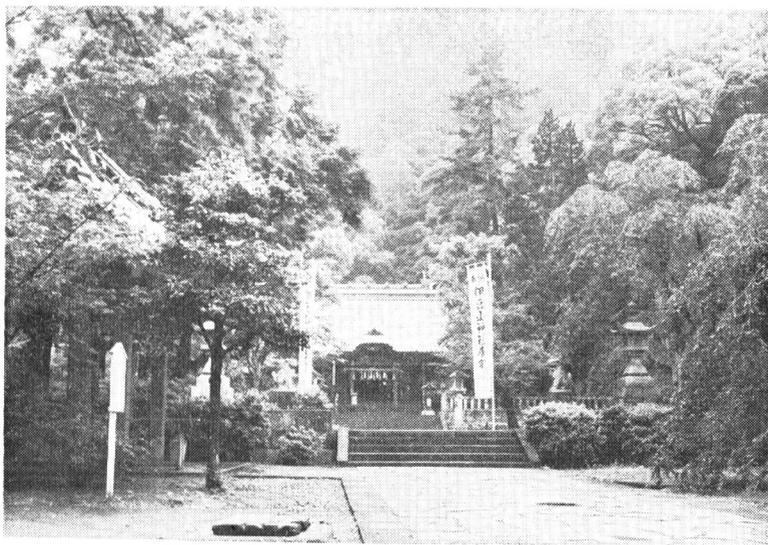
と、公文所は発展的に政所に吸収された。

頼朝が征夷大將軍に任ぜられて、名実ともに武家の府である幕府となるのは、建久三年（一一九二）のことであるが、その実はすでにそれ以前にととのえられていた。

文治元年十二月、頼朝に疎外されて挙兵を企てた義経が没落すると、頼朝は朝廷に強要して、義経の追討と、諸国を北条時政以下の御家人に分賜し、莊園公領に段別五升の兵糧米を徴収することを許す宣旨を得、頼朝を日本総追捕使（総守護）・総地頭に、有力御家人を国別総追捕使（守護）・地頭に任じ、国中の御家人を指揮して治安警察権を掌握するばかりでなく、国衙を支配して国衙の役人や莊園公領の下司・押領使もすべて鎌倉殿が支配するという宣旨が出された。これによって平氏の旧領や義経らの所領には、御家人が地頭に任命されることになった。武家政権の実質はこの宣旨で公的なものとなった。これによって任命された諸国総追捕使や地頭は、頼朝の挙兵以来彼に従って戦線に戦った相模・武蔵・伊豆・上総・下総・上野・下野の武士たちである。彼らは本名の地以外に全国に総追捕使職・地頭職の名で所領をもつことになり、中世に、相武の武士が全国にひろがる契機となった。またこれらの武士を統治する鎌倉殿のいる鎌倉は、京都と並ぶ政治の中心となった。

### 鎌倉街道の整備

鎌倉が武家の府となると、京都・鎌倉間の公私の往来はにわかになくなった。これまで京都と相模国府（当時の国府は現在の大磯町）を結び、内陸を横切って下総国府（市川市）に至る東海道は、大化前代の三浦半島を縦断して浦賀水道を横断する古道に復活することとなった。令制の駅は再編成さ



伊豆山神社 熱海市

れて、京都へ鎌倉間には数多くの宿が整備された。建長五年（一二五三）に鎌倉殿として迎えられた「宗尊親王鎌倉下向記」は、京都鎌倉間に三十宿をあげているが、この時代に京都から鎌倉へ下向した源光行の旅行記「海道記」（貞応二年＝一二三三）や、源親行の「東関紀行」（仁治三年＝一二四二）、有名な和歌の家冷泉家の所領争いの訴訟のために女性の身でありながら自ら幕府の裁定を仰ぐため鎌倉に下向して、鎌倉で没した阿仏尼の「いざよい日記」（建治三年＝一二七七）などによると、彼らの利用した宿には、多少の出入があるが、これらを総合すると、この時代には足柄越えと箱根越えがあり、前者は静岡県下の竹ノ下から足柄峠を越えて、関下（坂下）宿・逆川宿を経て鎌倉に入る、ほぼ平安時代の東海道の延長である。後者は、静岡県下三島宿から箱根山を越え湯本を経て、酒匂宿・鮎沢（藍沢）宿等を経て鎌倉に入る。源頼朝が伊豆に挙兵以後、伊豆三

中 世 島神社・箱根神社・伊豆権現の三社を特に信仰し、毎年年初にこの三社に詣でるのを例としたこともあって、箱根越え道が次第に重視され、室町時代になれば、足柄路はさびれて箱根路が用いられ、葦河・湯本・小田原・酒

匂・郡水・志保見・平塚・懐島・鎌倉の道中となった。この道中は、幕府の使者が往来して日本の歴史をゆり

うごかす大動脈となり、あるいは將軍に招かれた京都の文人・学者・芸能人が上下し、あるいは鎌倉番役を勤める西国御家人、あるいは京都守護・内裏番役を勤めるため上洛する東国武士、幕府に所領裁判を求める訴訟人たちが、それぞれの使命と迷惑をいさながら上下した。中世の政治・文化の大動脈の役割を果たした。

さらに東海道につぐ重要な道路として、東国に集中的に居住する御家人の動員を目的とする、東国各地から鎌倉に至る、いわゆる鎌倉往還（鎌倉街道は江戸時代の称）がつくられた。その中心となるものに上の道、中の道、下の道があつて、上の道は鎌倉から武蔵中央を北上して、上野・下野・信濃方面に至る道、中の道は、鎌倉を出て、東京湾と上の道の中間を北上して宇都宮・陸奥に至る道、下の道は、東京湾沿いに北上して、一は湾岸沿いに上総・下総方面に至り、一は分かれて常陸方面に通ずる。この三道の外に上総木更津から東京湾を海上横断して武蔵六浦に上陸し金沢を経て鎌倉に入る六浦道、甲斐国から御坂峠・籠坂峠を越えて鎌倉に至る道などがあつた。これらの道は、鎌倉に變事が起こった時には、御家人が寸刻を争つて馳せ参ずる往還であり、身の危険を感じた武士たちが鎌倉から脱出する道でもあつた。さらに、頼朝の奥州征伐、承久の乱に関東軍が大挙進撃する道でもあつた。



化粧坂 鎌倉市

### 鎌倉の町造り

鎌倉に集まる往還は、この外にもある。

その往還の鎌倉に入る口は、七つあって七口といわれた。極楽寺口・大仏口・化粧坂口・巨福呂坂口・六浦口・名越坂口・小坪口である。この七口が開かれた時期を、明確に伝える史料はないが、それぞれの口は鎌倉往還の起点でもあって、極楽寺口・化粧坂口は東海道、巨福呂坂口は下の道、六浦口は六浦往還、名越坂口は、三浦半島を経て、浦賀水道を渡って安房に至る往還の出口である。小坪口も同様である。いずれも鎌倉をとりまく丘陵を切り開いてつくったので、切り通しともよばれる。

頼朝が千葉氏らのすすめで、鎌倉の新第に居を定めたとき、三百十一人の御家人が居館を構えたが、その居館は必ずしも、都市計画にもとづいたものではない。当時の鎌倉は、軍事拠点であり、日本の政治の中心としての都市建設は、北条執権の時代になって、為政者の意識に上る。ただ

世 武士は神仏崇拜の念強く、頼朝も大倉に新邸を構えると同時に、由比ヶ浜はまから八幡宮を大倉邸の隣りの鶴岡にうつし、社前から由比ヶ浜に大路をひらき、葛石かぢいしを敷いた段葛だんかづらをつくって、京都の内裏うちらと朱雀大路すざくになぞらえ、都

市鎌倉の構想を示したが、建設は文治元年（一一八五）勝長寿院、同五年（一一八九）永福寺ようふくじがまず建立され、頼朝夫妻による仏事をしばしば行われたが、道路については、怠慢のあった将士の償いに道路つくりを命じた程度にすぎなかった。それが本格化するのには北条氏執権時代である。開府以後年月を経るにつれて、次第に行政的要素をつよめ、また武士の居住につれて、その生活的需要に応ずるための職人や商人も集まり、物資は、由比ヶ浜に揚陸されてにぎわった。承久の乱の数年後の貞応二年（一二二三）の「海道記」に由比ヶ浜のにぎわいを「此所をみれば、数百艘の舟ども、綱をくさりて大津のうらに似たり、千万宇の宅、軒をならべて、大淀おほよどのわたりに異らず」と記している。大津は近江（滋賀県）の大津、大淀は山城（京都府）淀川の港で、ともに京都の外港である。この言葉には、由比ヶ浜のにぎわいととも、鎌倉が京都と並ぶ都であるとの認識がある。弘長三年（一二六三）八月十四日大暴風雨のため由比ヶ浜にあった数十艘の船が漂没し、二十七日の大風雨で伊豆沖で漂流した鎮西年貢運送船六十一艘も、由比浦に向かうものであったであろう。こうした風波の難をさけるため、貞永元年（一二三二）往阿弥陀仏おうちあみだぶつの勧進によって、和賀江島わかえじまが築かれた。建保三年（一二二五）七月、幕府は結城宗光ゆきむねみつを奉行として町人以下鎌倉中の諸商人の員数を定めたのをみれば、早い時期にすでに商人の制限を必要とするほどの都市化が進行していたのである。小町大路・小坪路・横大路・今大路・東大路・西大路などの大路の整備もすすみ、仁